



金澤八景

照天
操月
毛初
編鹿
松

小栗十騎

春風亭柳枝作

上

~13
3861
1



門へ13
3861
1
巻

小栗十騎

初篇上之巻

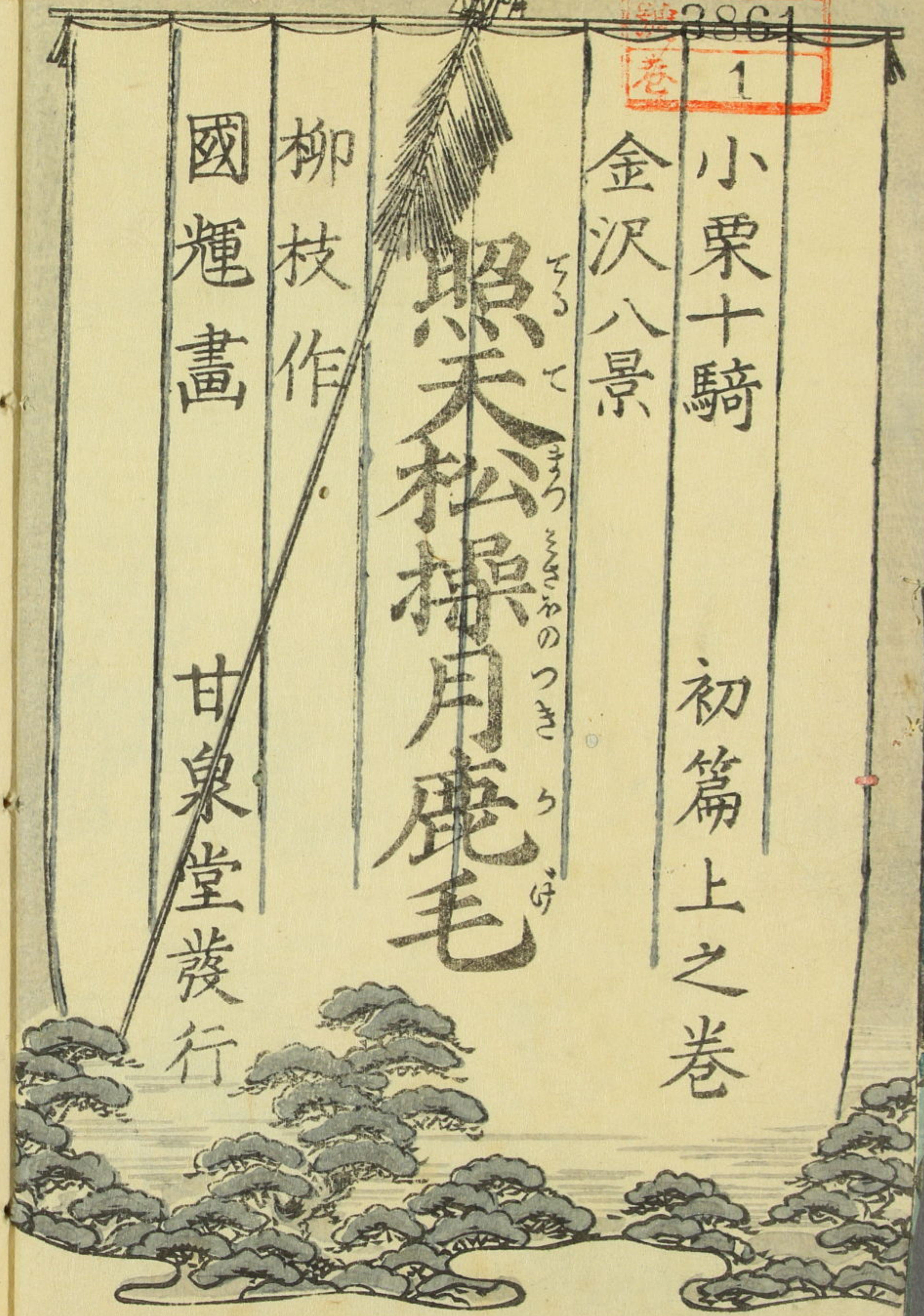
金沢八景

照天松標月鹿毛

柳枝作

國輝畫

甘泉堂發行



其職そのしやくふ在あらぶはくは其門そのかどふ遊あそぶ時ときハ心勞こころうしと

その功こうあり然しかるはといいふも走はる者ものハ道みちをとんと

川狩かわがしハ川がままを山狩やまがしハ山の終はる世俗せぞくの言こと

葉はむむららうう邪よこしま肘ひぢを曲まげまげ枕まくらととる毛唐人けどうじんも

樂たのむむははままににわわかかままくく智惠ちゑを震ふるひ出いしし

苦くるししむむららも亦また好このむむららもも聊生りやうせいを樂たのむむハ足あまり

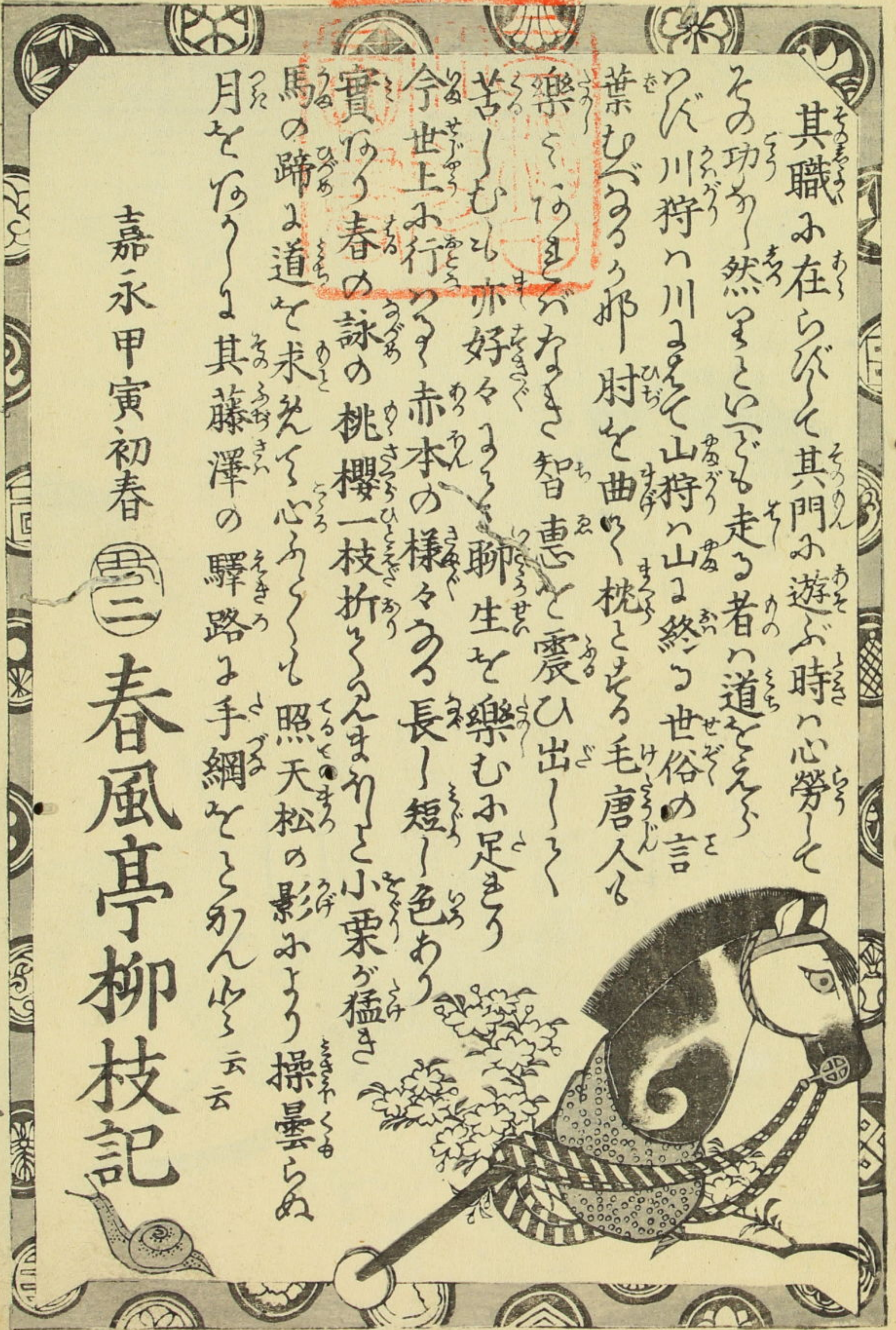
今世いまよ上かみハ行いくく赤本あかほんの様よう々々ある長ながし短みじし色いろあり

實じつあり春はるの詠うたの桃櫻ももざくら一枝いちえだ折おるるんんままりりと小栗こ栗が猛ままま

馬うまの蹄ひらは道みちを求もとめめて心こころありりも照天松てんてんしょうの影かげふふより標曇ひょうどんらぬ

月つきををららううも其藤澤そのふぢざいの驛路えきぢをを手綱てづなををととかんかんゆゆ云いふ

嘉永甲寅初春
三 春風亭柳枝記





名武篤光息女照天姫

横山太郎
安秀



小栗孫五郎
満重

小栗
小次郎
右
判官代
助重



修驗者怒りて
急流に身を
そとさふ



藤代川漢父
小弥太
后池庄司
助長
号



再出
照天姫



浦浪師網六
妻藤浪

藤浪處女
娥子



右の女は... 扇を手に持てて... 姿は美しく...

左の女は... 衣類は豪華で... 優雅な所作を...

下の女は... 跪いて... 何かを捧げている...

右の女は... 扇を閉じて... 静かに佇む...

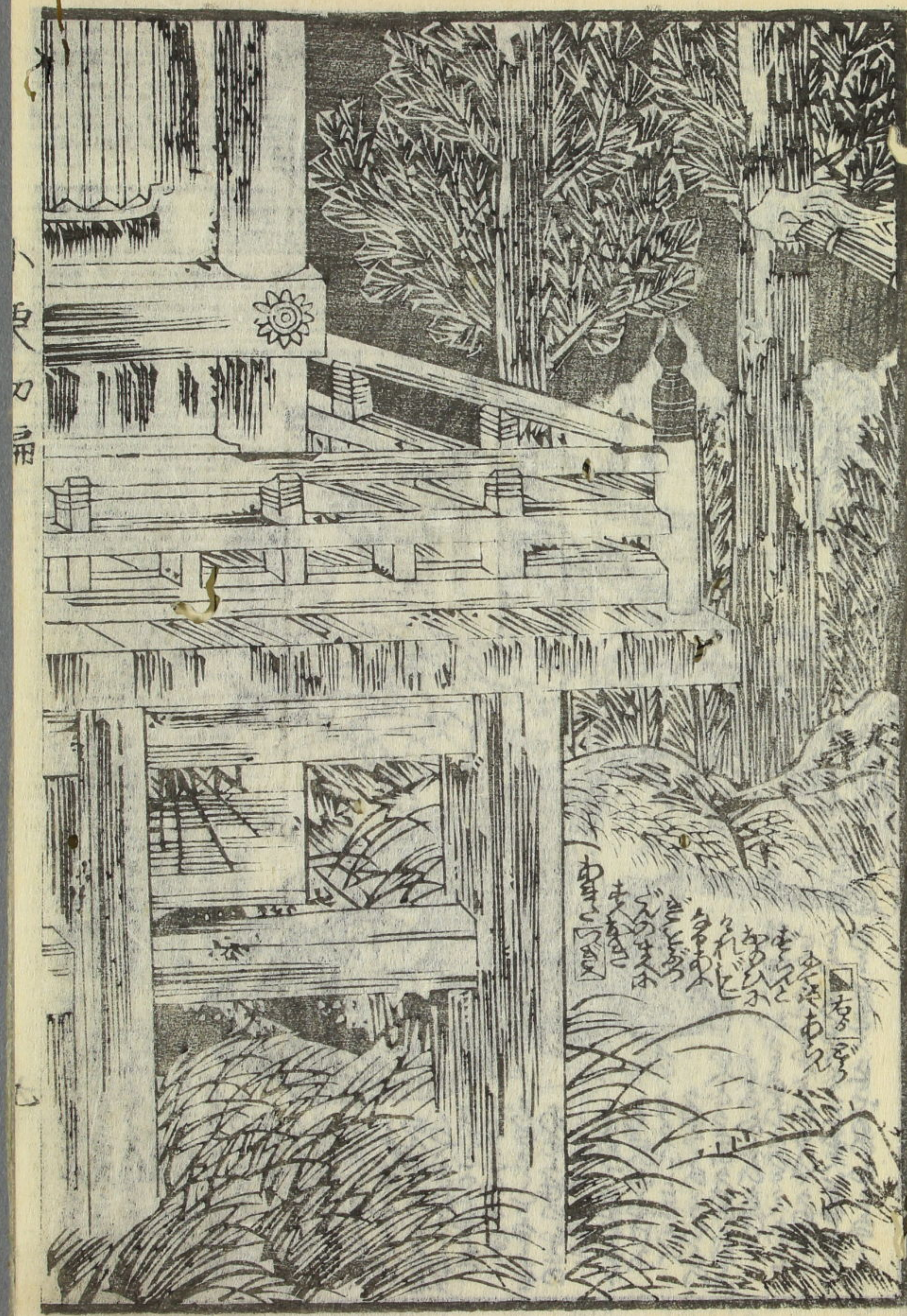


上の女は... 刀を手に持てて... 威風凛々とした...

左の女は... 衣類は上品で... 優雅な所作を...

下の女は... 跪いて... 何かを捧げている...

右の女は... 扇を閉じて... 静かに佇む...



石ノ箱

右ノ
中ノ
左ノ
下ノ
上ノ
中ノ
左ノ
右ノ
下ノ
上ノ



右ノ
中ノ
左ノ
下ノ
上ノ
中ノ
左ノ
右ノ
下ノ
上ノ

持

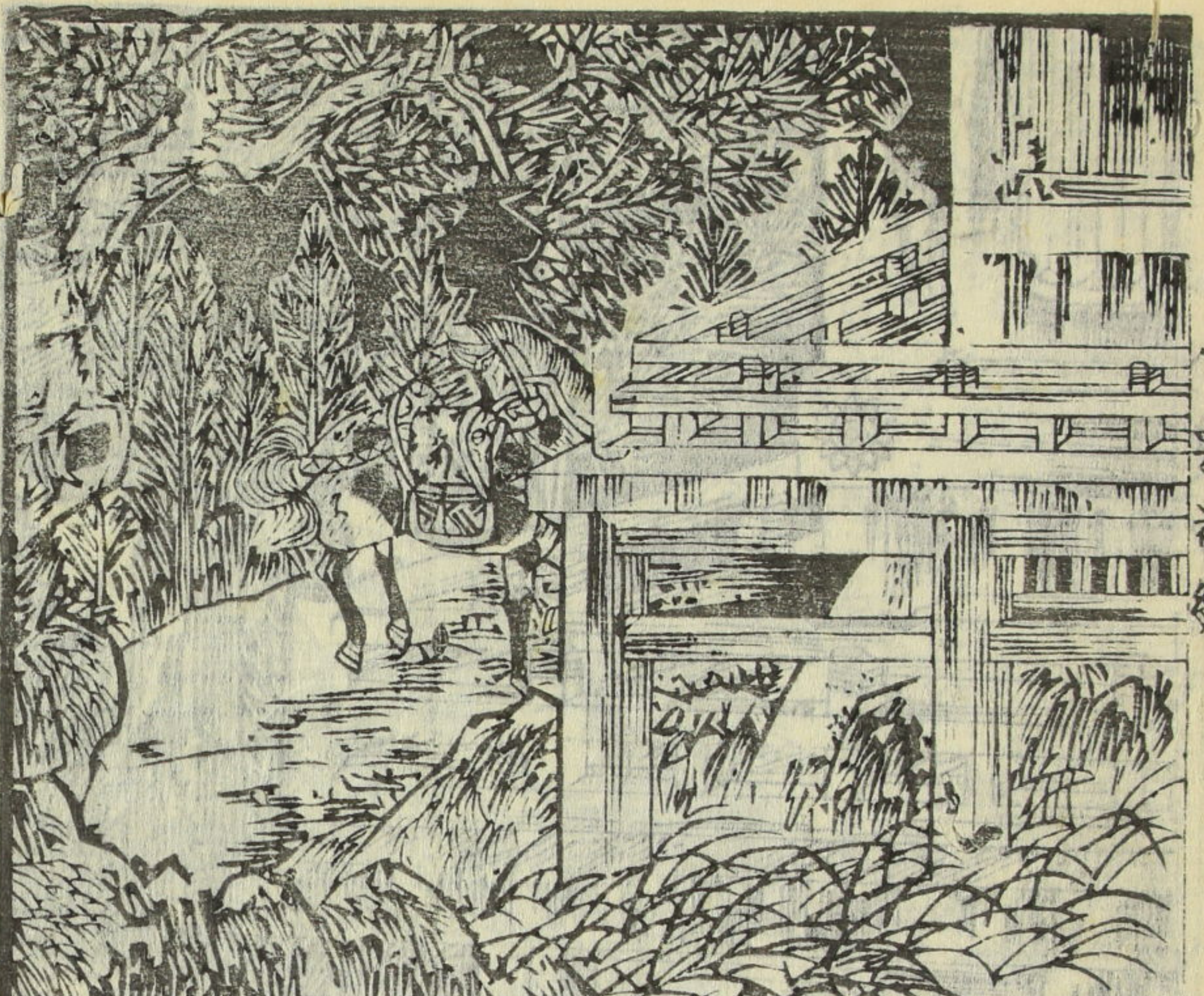


○中
○中
○中
○中

○下
○下
○下
○下

○上
○上
○上

長崎の町に
ある寺に
住んで居る
僧侶の
一人が
ある日
山へ
出かけた
時
ある
狐に
出逢つた
狐は
僧侶に
話しかけ
て
僧侶は
狐の
話を
信じて
狐の
誘ひに
従つた
狐は
僧侶を
山奥へ
連れて
行つた
僧侶は
狐の
案内で
山奥へ
行くと
狐は
僧侶を
殺して
食つた
僧侶は
死んで
しまつた
狐は
僧侶の
死を
喜んで
居た



狐狸に
出逢つた
狐狸は
僧侶に
話しかけ
て
僧侶は
狐狸の
話を
信じて
狐狸の
誘ひに
従つた
狐狸は
僧侶を
山奥へ
連れて
行つた
僧侶は
狐狸の
案内で
山奥へ
行くと
狐狸は
僧侶を
殺して
食つた
僧侶は
死んで
しまつた
狐狸は
僧侶の
死を
喜んで
居た

嘉永七甲寅新影略目錄

小倉百人一首

極道のしるし
小倉百人一首

新編金瓶梅

十編揃
馬琴作
豊國画

小女郎蛛怨麻環

三編讀切

馬琴作
國芳画

兒雷也豪傑譚

廿四編
廿五編
廿六編

柳下亭種員作
一雄齋國輝画

一雄齋國輝画
兒雷也豪傑六

右双のり原紙のしるしを
初めんと其編述のしるし
画のしるしよりしるしを
えりて其しるしを
其末のしるしを

芝神明前
甘泉堂版



柳枝作國輝画

篆文

𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎
𠄎	𠄎	𠄎

篆文